

生研トピック

1. 電気談話會

當部では從來毎週金曜日に電気談話會を開催し、教官職員相集つて研究の發表を行つて來た。そして一同の討論を経てから學會その他の機關誌に論文を發表するならわしにしている。所が最近學會誌等では論文提出後印刷公表になるまでに半年以上もかかる現状なので、折角の研究を少しでも早く周知させるために、また當部の記録として残すために研究の要旨をガリ版刷りにして希望者に配布し、又保存することにした。このことは1950年1月より實施しており、1951年末までに約100篇の論文が紹介された。

以下に昨年12月以來發表された論文題目を掲げることにする。

第57回 電気談話會 1951年12月7日

特研究生 尾上守夫、大学院學生 増田聖、雇員 市川初男(高木研究室)：自動位相制御による安定化可變周波發振器。第2卷、第48號。

内地研究員 相川孝作(山梨大學助教授、星合研究室)：水銀整流器内に發生する低周波電気振動。第2卷、第49號。

内地研究員 鈴木喜彦(徳島大學助教授、藤高研究室)：細い導線の衝擊電流による溶斷特性について。第2卷、第50號。

第58回 電気談話會 1951年12月14日

助手 望月仁(星合研究室)：熱電子放射式とその變形。第2卷、第51號。

助教授 中西邦雄：低氣壓に於ける開路特性(誘導負荷の場合)。第2卷、第53號。

第59回 電気談話會 1951年12月12日

特研究生 猪瀬博、雇員 久保卓藏(森脇研究室)：雜音を利用した擬似通信呼發生裝置(I)。第2卷、第52號。

助教授 野村民也(星合研究室)：電氣的含濕量測定器(第1報)、Qメータ法の測定範圍及び誤差。第2卷、第54號。電氣的含濕量測定器(第2報)差動蓄電型含濕計。第2卷、第55號。

第60回 電気談話會 1952年1月25日

助教授 丹羽登、雇員 佐下橋市太郎(高木研究室)：超音波厚味計によるタンク厚味測定。第3卷、第1號。

教授 高木昇、特研究生 尾上守夫、大学院 増田聖、第2部 助教授 安藤良夫、大学院 飯田國廣：多現象同時測定用抵抗線歪計の試作。第3卷、第2號。

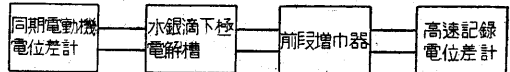
2. 自記式ポーラログラフ裝置の試作

ポーラログラフ分析法は本邦でも金屬關係ではJISに採用され實用に入り、藥品、石油關係その他の分析に應用する等工業分析として廣範圍に擴がっている。

工業分析に用いるためには從來の印画紙に鋭感檢流計のフレを記録する方法では種々不便も多いのでペン記録式が用いられる。さらに定量分析としては限界電流の大きさを精確に計る必要から、直角座標に記録するのが有利である。そこで横河電機と共同研究をとりER21型記録電位差計をスピード化して、また電流感度を増す方法をとつた。記録紙は從來のものは1時間に50mm、前後のものを1分間に12.5mmにして、さらに電壓は-5mV~+55mVと感度を落して電流感度を上げるよう製作が進められている。

電位差計の方は當所の中央工作所で製造し、同期モーターで記録計の記録紙と合致するように回轉させた。

さらに小型の電位差計を同期モーターで廻す方もほとんど製作を終つている。電流感度の方は現在の所記録計だけでは全スケール50μAが精一杯の所なので、前段増幅器で直流増幅を行い、また記録計の入力抵抗は1kΩ以内にある必要があるのでカソードフォロワーにした。



そして電流感度は全スケールで0.1μAより50μA迄可變になるよう設計して前段増幅器を作つている。

横河電機で製造中の記録計の製作が遅れ、まだ全體の組立に迄至つていないが、三月末迄には全體の製作を終り本格的自記型ポーラログラフとして種々の分析に利用してみる豫定である。(仁木榮次 27.2.11)

“生産研究”第4卷 第3號(3月號)

正 誤 表

頁	段	行	種別	正	誤
10			折込裏面表	A型構造圖縮尺約1/100	A型構造圖縮尺約1/1000
11	左		本文	部材應力算定の項に入れる	基礎底面積の決定の項に入つている
11	右	下6	第14圖	基礎底面積の決定	基礎底面積の決定
20	左		第8圖	乾板上の距離	乾板上の
21	右	下3~2	第11圖説明	送り方向	上り方向
21	右		第11圖説明	後で	後者では
21	右	14	本文	歪	歪
21	右	30	本文	應力擾亂	應擾亂力
21	右		第13圖實線	(第13圖實線)	(第12圖實線)
23	左	下1	本文	V ₅	V ₆
24	右		速報・第4圖	6C6の第3格子を陰極につなぐ	
28	右	6	本文	不動態	不動態
28	右	20	本文	電気工學	電気工力
34	左		筆者紹介	根岸勝雄 超音波測定	超音波材料